



© 2007 「魍魎の匣」製作委員会



■「魍魎の匣（もうりょうのはこ）」
 ■監督／原田眞人 出演／堤真一 阿部寛 椎名桔平
 宮迫博之 田中麗奈 黒木瞳 他
 ■MOVIX京都
 ■2007.12.22～
 ■問い合わせ 075-254-3215
 (24時間番組案内&FAX取出しサービス)

猛烈に迫り来る魅惑の謎は、
 「匣」に秘められた過去にあり。

残念ながら、物の怪は京の専売特許という認識は間違いらしい。本人が秘かに陰陽道の修行をしているはずと、アタクシが勝手に確信している京極夏彦の代表作シリーズが、またもや映画化である。しかも前作とは監督を替えて。豪華な役者陣はほぼそのままに、いかに京極ワールドを表現するか、原作の愛読者としては高みからの見物といった気持ちで拝見。

戦後まもない東京にも、怪は現われ、大いに人を惑わせる。急激に変わりゆく時代の流れの中で、忘れ去られていくかのように、そこかしこに潜む闇。そこから気配を覗かせるいくつもの謎。開けてはいけないと言われれば開けたくなるのが人の性。見てはならない

と分かっている見たい誘惑には抗えない。それは、古くから変わらぬ人の深い業だろう。

スクリーンに映し出される、狂気、情愛、享楽、驚愕、生死…。薄暗く、ときに眩しく、存在する命の数々。そこに息づくいくつもの不思議を突きつけられて感じた、指先まで身動きがとれないような痺れに、13年前はじめて「姑獲鳥の夏」を手にしたときの衝撃を思い出した。それこそが、京極ワールド。

原作はあまりのボリュームゆえに挫折した人も少なくないだろうが、いま一度、映画から入り直すのも賢明な選択だろう。

(山田涼子)



イベント・ライブ・演劇に映画、
 CDリリースから書評に至るまで、
 骨太entertainmentを丸飲み!

MOVIE

12.22~
 (Sat)

街場

肩の力を抜いて、自由に語ろう…、
 京の街と付き合うと「ついで」。

の
 演算

文
 袖岡保之

【第四回】

イタリヤと京都、

道すがらにある、店のセンスや佇まい。
 そういったものが近いのだ、きつと。

先月と同じような出だしであるが…10年ほど前に僕が編集したムックに「京都・大阪・神戸・レストラン&ワイン 最前線」というのがあった。

その時の巻頭でビックアップしている京都イタリヤンの面子を眺めてみると、「イル・パツパラルド」「ディボ・ディバ」「カーサ・ピアンカ」「トラットリアのみうら」「プリンチペツサ」「トラットリア」「フジイ」「アペルトウーラ」「オステリア・ペントラ」「カーネガット」。ふむふむ、という感じじゃないだろうか。と思うと同時に、京都は時代の気分として'90年代に「良いイタリヤン」に恵まれた街だったとも考えられないか？

その答えが、今回の特集のラインナップとしてあると言っても過言ではないだろう。

祭の時は毎日のように出かける祇園界隈であるが、本誌編集部も事務所もいわゆる御幸町以西である。気軽に…というわけでもないけれど、「キメラ」「ギョッターネ」「t.v.b」といったところにはなかなか足が向かない(というか手が届かない)。で、最近のお気に入りには「タヴェルナ・イル・ヴィアーレ」「コチネッタ」「ryuan」(これも事務所から歩いて10分!)でも、どの店もいろいろと考えたメニューが出てくるし、本当、気に入っています。正直いうと3軒とも安いとも高いとも言えない。

ペルセポリス

MOVIE

2008.1~

「中東の京都」イランの屈強なユーモアを、少女の目を通して描いた傑作アニメ。

ニュースキャスターがイランとイラクを言い間違えるほど中東オンチの日本だが、ややこしいと思う人は「イランは中東の京都」と覚えておくといい。ペルシャ帝国として栄えたイランのプライドは高い。それをアラブと混同することは京都人を関西人に一括りにするようなもの。「うち、アラブとちやいます。ペルシャどす」とイクスされてしまう。マジに。

同作は'79年のイスラム革命期に思春期を過ごした作者の回想を描いたコミックが原

作。欧州のようだった街は革命によって突然、宗教保守のシンボル・黒いヴェールに埋め尽くされた。少女・マルジは将来の不安から祖国を離れひとりでウィーンに留学。生活は荒れ、男に騙され、ドラッグまで…。映画よりも奇なる激動の時代に翻弄されながら、反骨精神と自尊心を守り抜くマルジの姿に共感ヒシヒシ。相当ヘヴィな内容なのに、笑い満載。強靱なユーモアもイラン魂と覚えておくといい。

(沢田眉香子)



© 2007. 247 Films, France 3 Cine'ma. All rights reserved.

- 「ペルセポリス」
- 原作・監督・脚本/マルジャン・サトラビ 声の出演/キアラ・マストロヤニ、カトリーヌ・ドヌーヴ
- 京都シネマ
- 2008.1月~
- 問い合わせ 075・353・4723



©MMVI NEW LINE PRODUCTIONS, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

- 「マリア」
- 監督/キャサリン・ハードウィック 出演/ケイシャ・キャッスル・ヒューズ 他
- 配給/エイベックス・エンタテインメント
- 京都みなみ会館
- 12.8.~
- 問い合わせ 06・6455・7827 (オフィス・リブラ)

マリア

MOVIE

12.8.~
(Sat)

そうそう、クリスマスまでが、肝心なんだよな〜、って何の話？

いざ、やってきます12月の25日はクリスマス。「主は来ませり♪」でも、彼女も彼氏も来ないってのがだいたいのオチなんだけども…。そうクリスマスまでが何はともあれ勝負ということ。えっ？ここは京都やて…。確かに。でもクリスマスまでに段取りよくものごとをしとかんと、年の瀬、年始めが慌たしゅうてしゃあないってもんです。

そう、これは、クリスマスまでに段取りよくやっていけば、幸せになれるというお話です。といたいところだが、そ

れは話し半分。で半分（というか全部です）はキリスト誕生までの世にも不思議な物語をリアルに描いた作品であるということ。

キリストが贖罪の為に十字架にかかり奇跡の復活をとげることになるのは、キリストが生まれるまでの物語の中に多くの意味や暗示があり、誰もがその日のために導かれていくということがわかる。

レストランで、命の水=ワインを染しむのは、この映画を見てからどうぞ。(袖岡保之/本誌)

にくい値段設定なんだが、逆に言えば絶妙な料理の値段の付け方である。そして、何よりも美味しいワインを適正な価格でドロップしているのが素晴らしい。値ごろ感で言えば、ワインのチョイスは10年前に比べると数段レベルが上がっていると思う(もちろん「カーサ・ピアンカ」の那須さんの痺れるようなイタリアワインのチョイスは健在です)。

う〜ん、なんかイタリアン好きがバレバレで困るが、どうして京都人はイタリア(なるもの、的なもの、そのものが好きなんだろう？ あんまり良い思い出ではないのかも知れないが、太平洋戦争でも同盟国であったし、イタリアのことを悪く言うのを、おちよくり話でも京都ではほとんど耳にしない。

些細な疑問であるが、それはそれでなるがままに受け止めてもいいんじゃないか？ 解が無いまま話を進めると(なかなかラテン的でしょ？)、フレンツェに行った時(まだR・パツジオがいました)、グッチの本店や、マルチェロ・マストロヤニがしているという手袋屋(すいません、ネーム忘れました)、そしてファルマチア・S・マリア・ノヴェツラ…。どの店も不思議と京都の道すがらにある「宮脇賣扇庵」などと同じ匂いというか、佇まいみたいなものを感じたのを覚えている。ローマはローマで、コロッセオとかがポツカ〜ンと現れるあの感覚は本願寺なんかに近い。トレビの泉は、六角堂や錦天宮的なポジショニングという感じ。

う〜ん、夏にパリにいったきたけれど、そんな感じ方は全くしなかったな。なんて思うと、無性にイタリアに行きたくなってきた…。ま、しばらくは、京都のイタリアがあるからいいか。

袖岡保之/フリー編集者、三条堀川西入ル、三条会商店街内に編集プロダクション「E.S.S.」を設立。ガラス張りの路面の事務所なので、よく古書店と間違っって街ブラなカッパルがやってくる。ちなみに町家でお酒をのむのだが、トイレが離れてトイレに